

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 37 集 (2005年度) 2006年 3 月発行：329—350

初年次学生の進路意識とキャリア科目の役割

町 井 輝 久・山 岸 みどり

初年次学生の進路意識とキャリア科目の役割

町井輝久*
山岸みどり**

はじめに…キャリア科目「大学と社会」の立ち上げの背景と研究の課題

昨今、各大学等で一般教育等にキャリア科目を立ち上げるところが増えている。学生に早い時期から将来の進路を考えさせ、そのために大学ですべき事柄の理解、さらには意欲的な学生生活の設計などから具体的な就職対策まで幅広くあり、また座学だけでなく、いわゆるインターンシップなどの企業体験学習も導入するところが増えている。本学でも2003年にキャリアセンターが立ち上がり、就職情報や就職相談の業務を行うだけでなく、学生委員会・生涯学習計画研究部と共同で、インターンシップの実施やキャリア科目の体系化を図っている。

受験競争の過熱化などを背景に、近年大学に入学後半年ぐらい経過する中で、「自分が本当にやりたいこととは違って」「学部・学科の選択を誤った、大学や学部をかわりたい」「自分は何をしたいのか見つけられないので、大学の授業が面白くない」などという声が、初年次生から良く聞こえてくる、ということは全国の大学で多く聞かれることである。北海道大学でも半年ぐらい経過した初年次生にアンケートを実施すると、例年2～3割の学生から「現在の学部から他の大学や学部へかわりたい」という回答が出てきている。

「本当は獣医学部へ入りたかったが成績を考えて経済学部にした」「どの学部を選択して良いかわからなかったら、つぶしがきくから法学部を受けてみたらとすすめられた」など高校の進路指導のあり方とも関わって、「大学で何を学ぶか」よりも「大学にともかく入学すること」を目的とした学生が増えている。「将来どんな職業に就きたいか」という進路意識も、「まだ決めていない」「何をやってみたら良いかわからない」という学生が少なくない。

こうしたことから、北海道大学では一般教育科目に各職業分野で活躍する卒業生を講師として招いて、自らの職業や専門分野、仕事のおもしろさややりがい、人生経験などを語って貰うとともに、大学時代にどんなことを身につければよいかなどを話して貰う、全学教育特別講義「大学と社会」を1998年度から開講した。

本学では約500人の学生が受講する特別講義「大学と社会」を対象として、第1回目の講義と講義の最終回に、進路意識や大学における学び等について質問紙調査を実施するとともに、講義終了時に試験の代替として「私のライフプランと大学での学び」という題でのレポートを提出させているが、小論は、それらをもとに初年次生の進路意識や、大学生活に対する考え方、大学教育におけ

* 広島大学高等教育研究開発センター客員研究員／北海道大学高等教育機能開発総合センター教授

** 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授

るキャリア科目の必要性とそのあり方等について考察を試みたものである。

第1部では、キャリア科目「大学と社会」がどのようなねらいと仕組みで設計されているか、学生達はどのような期待を持ってこの講義に参加しているか、期待は達成されたと言えるか、学生達の進路への不安とはどのようなものか、ライフプランのレポート作成を通してどんなことを考えたかなどの分析を通して、キャリア科目「大学と社会」の意義を①「将来の進路を考えるきっかけとなる」②「実社会の仕事や職場の雰囲気を知る」③「大学での学び・学生生活の送り方の参考」といった視点から考察し、初年次におけるキャリア科目学習の意義と役割について考察した。

第2部では、特別講義「大学と社会」の受講生を対象として、毎年実施してきた「北海道大学生の進路意識と大学生活に関する調査」の分析結果をもとに、入学後半年を経た初年次学生の進路意識について考察した。

第1部は町井輝久が、第2部は山岸が分担執筆した。

第1部 北海道大学における全学教育特別講義「大学と社会」と1年生のライフプランづくり

1. 特別講義「大学と社会」と1年生のライフプランづくり

(1) 特別講義「大学と社会」について

全学教育特別講義「大学と社会」は、1998年度から中村陸男現北海道大学総長の発案で始まったものである。実社会で活躍する卒業生を講師に招き、自らの職業や専門分野、仕事のおもしろさややりがい、人生経験などを語って貰うとともに、大学時代にどんなことを身につければよいかについても語って貰っている。同様の企画は九州大学などで行われていたが、卒業生を講師としているところが本学の特徴である。先輩―後輩ということで、実社会の話でも学生にとってより身近なものとして受けとめられるという利点とともに、講師の方も後輩と言うことで遠慮のいらぬ率直な表現で学生達を叱咤激励してくれる。例えば「北海道大学などというブランドは就職試験の時に何の役にも立たない、自分が何をできるかが問われている」など、「良い大学にはいれば良い企業に就職」という受験の時から「良い大学イコール良い就職」という安易な考え方をずばっと指摘してくれるのも先輩ならではの。

資料1のように例年総長をはじめ、各部署の先生方に講師にふさわしい人を推薦いただき、毎年度10～11名の卒業生による講義を後期金曜日の3講時に開講している。講師の選定に当たっては、企業のトップだけでなく、就職後5年ぐらいの仕事の面白さと難しさを感じるようになった時期の卒業生までなるべく幅広い年代の人で、また職業の分野も学生が関心のある幅広い分野になるよう依頼してきた。堀前北海道知事や道内の市町村長、坂本 JR 北海道社長、横山ラルズ社長、長沼きのとや社長など企業や組織のトップであるだけでなく豊かな人生経験のある方々、弁護士さんやモンブランで遭難した体験を持つ医師、プロジェクト X に登場するような技術者の方々、日本一の動物園といわれるようになった小菅旭山動物園長、クマ牧場やマリモの博物館の学芸員、学校教師

資料1 2005年「大学と社会」の講義日程

「大学と社会」

第一線で活躍中の諸先輩の体験や考え方にふれてみませんか？
 自分の将来の進路と、
 そのための今の学生生活の送り方について
 考えるヒントを得よう！

- 仕事のおもしろさ・しんどさ
 - どのようにして仕事にやりがいを見つけたか
 - リアルワールドで成功するためにはどんな力を身につけたか
 - 学生時代どのように過ごしたか

2005 10/7 講義ガイダンス

10/14 「教えるということ」ー黒板を後にしてー
清未定子(きよすえていこ) <北海道札幌稲雲高等学校・校長◇理学部卒>

10/21 予備日

10/28 「動物園論」
小菅正夫(こすげまさお) <旭山動物園・園長◇獣医学部卒>

11/4 「21世紀の企業社会はどんな人材を求めているか」
(仮題) 松田昌士(まつだまさたけ) <東日本旅客鉄道(株)・会長◇法学部卒>

11/11 「住民参加型地方自治と自治体職員の働きがい」
(仮題) 逢坂誠二(おうさかせいじ) <前・ニセコ町長◇薬学部卒>

11/18 「地方(ローカル)だからこそできること」
藤村忠寿(ふじむらただひさ) <北海道テレビ放送(株)コンテンツ本部
 編成戦略センター◇法学部卒>

11/25 「差別と暴力に挑む」
中野麻美(なかのまみ) <なかのまみ法律事務所・弁護士◇法学部卒>

12/2 「‘大学生’と‘社会人’」ー半人前からのメッセージー
島田麻美(しまだまみ) <JALセールス・九州支店国内販売部販売グループ
 ◇国際広報メディア・教育学部卒>

12/9 「野球でこぼこ道」
山崎夏生(やまざきなつお) <パシフィック野球連盟審判部◇文学部卒>

12/16 「自動車会社の仕事と働きがいについて」
柏倉利四秀(かしくらしひで) <いすゞ自動車自動車(株)
 エンジン実験部耐久実験第一G◇工学部卒>

2006 1/13 「人生を楽しく生きられるヒント」ー私が農業をはじめたわけー
吉川友二(よしかわゆうじ) <農業自営◇水産学部卒>

1/27 ライフプラン発表会

問合せ先：高等教育機能開発総合センター
 生涯学習計画研究部 町井輝久
 内線 6069

や少年院の法務教官。NHKの森田美由紀さんも3年越しの依頼が実り、昨年度講師として教壇に立っていただいた。

また谷村志穂さん、加藤幸子さんなど作家の方々や三浦雄一郎さんなどの冒険家も多忙な中講師として教壇に立っていただいた。これまでにおよそ70人の卒業生の方々に協力をいただいた。毎回の講義では質問の時間を20分間取り、学生からの質問に答えることを通して、大人数授業であっても一方通行にならないよう、学生との交流を図るようにしている。

講師によっては質問の時間の方が生き生きと話したり、本音で語ったりする。質問を多くするために質問した学生には評価点を出すところからあらかじめ伝えてある。そのせいもあって質問の時間はいつも足りなくなる。講義の最後にミニレポートを毎回提出するが、単なる感想ではなく、「講師への手紙」というテーマで講師の話から自分は何を受け止めたか、講師に聞いてみたいことなどを書かせている。実際講師の方々にはすべてレポートをコピーして送って読んで貰っている。幾人かの講師は「講師への手紙」を読んだ感想を伝えてくる。受講生にはその手紙を配布している。大人数授業であっても少しでも講師との心のつながりをもたせたいという期待を持っている。

2001年度からは「私のライフプランと大学での学び」というテーマで試験に代替するレポートを提出させるとともに、そのレポートをもとに受講生自身が講師となって話す「ライフプラン発表会」を実施するようになった。このライフプラン発表会は総合学科高校で実施されているものを参考にしたものである。

(2) 受講生のプロフィールと受講動機

「大学と社会」の受講資格は1年生を主たる対象に全学に開かれているが、受講生の学部により偏りがあり、医・歯・農学部・獣医学部はこの時間帯に必修講義が入っているために受講できない。必修は入れないように要請しているが、過密なカリキュラムのなかで、どの時間帯でも全学生に受講の機会を与えることは不可能である。受講生は最初の年は250名であったが、受講希望者が多いため、2年後からは500名の大講義室に教室を移し定員を倍増させた。しかし受講希望者は700名程度いるため、毎年ガイダンスの時間に先着順で500名に受講を制限している。受講生の割合では、毎年工学部・経済学部の学生がもっとも多く、2004年度で文系受講生の割合が52%、15年度で53.4%となっている。

1年生がほとんどで、男女比ではほぼ毎年2対1で、新入生全体の男女比と類似している。また北海道出身者は52.8%で道外出身者は45.4%でこれも本学入学者の比率とほぼ同様である。

この講義を受講した理由については、「自分の進路について考えてみたかった」「実社会の職業や職場について知りたかった」「産業界や行政機関などで活躍する人など日頃聞けない人の話を聞けるから」「卒業生の話に興味があった」という開講意図に沿った回答が毎年多いが、3つの選択可能な回答理由の内一つに「単位が取りやすそうだったから」「友達に誘われて」「何となく」を選択した受講生も毎年3分の1以上あり、講演主体の講義の問題点が絶えず存在している。この点を改善するために毎回の「講師への手紙」ミニレポートにおいては2、3行の「面白かった」「ためになった」といった抽象的な感想めいたものは全て出席点をゼロにし、講師の話から自分は何を得

たかを具体的に書くよう指導したり、質問等に対しては加点するなど受講生に周知させている。

「講義を選択した際に期待したことが学べた」かどうかについては、「期待した以上のことが学べた」と積極的に評価する回答はどちらの年もほぼ20%で、これに「どちらかといえば期待通り」を加えた比率は69.6%（2003年は72.7% 以下、カッコ内の数字は2003年度調査の結果を示す）で2年ともほぼ7割が期待通りの成果と肯定的に評価している。その理由としては「普段聞くことのできない実際社会に出ている人達の生の意見を得ることができた」「自分の進路を考える上で非常に役に立つ話を聞くことができたから」といった理由が多かったが、「学生生活にやっておくことは語学と仲間との交流という確信を得ることができたから」といった、生き方・過ごし方の再確認をしたといった意見もあった。（ちなみにほとんどの講師に共通した話として、学生時代に異分野の友達を作ること、コミュニケーション能力を養うことが、話された）

「どちらともいえない」という回答が22.9%（16.4%）あるが、その理由としては「毎回の講師によって異なる」という自由回答が多かった。「どちらかといえば期待はずれ」「期待はずれ」5.7%（10.2%）で年によってのバラツキがあるが、無視できない数字である。その理由として自由回答では、「もっと学生生活の指針を明示してほしかった」「（前略）比較的似通った話が多かった」「専門的すぎたり、ちょっとした武勇伝（自己PRなど）は宣伝が多すぎ、もっと学生生活について聞きたかった」「おもしろかったが自分の興味のある分野がなかった」「話が下手」など自分の興味関心とのズレを指摘する意見が多かった。学生時代の過ごし方については司法試験に取り組んだ卒業生など以外は、あまり勉強しなかったという話も多かったので、2004年度からは学生生活へのアドバイスに力点を置くよう講師に事前に伝えた。

講義の目的であるキャリア形成ということに関わった設問として「どんな点でこの講義は役に立ちましたか」という問いへの学生の回答は、「自分の将来の進路を考える上で参考になった」が54.2%（55.9%）で、半数の受講者が自分の将来の進路を考える上でこの講義をプラスにしている。また「実社会の仕事や職場の雰囲気を知る」37.5%（35.2%）「社会人としての心構えを学ぶ」30.4%（22%）といったリアルワールドへの理解を深めるといった講義のねらいについても受講生の評価は高く、また「大学で何を学べばよいか参考になった」16.1%（17.4%）「学生生活の送り方に参考になった」32.4%（30.3%）と一定の評価を得ており、こうした点では「大学と社会」が目的とした3つの目的はほぼ達成されていると考える。

もう少し具体的に見ると、受講した理由として、「自分の将来の進路を考えてみたい」という理由を選択した学生の74.5%が「自分の進路を考える上で参考になった」としており、「実社会の職業や職場について知りたい」という理由で選択した学生の44.9%が「実社会の仕事や職場の雰囲気を知る」上で役に立ったと評価していて、さらに「社会人としての心構えを学ぶことができた」という点でも、一定の評価をしている。「大学生生活の送り方に興味があった」という点で受講した学生も47.4%が「学生生活の送り方について参考になった」として、高い評価を与えている。これに対して「単位が取りやすそうだったから」といった理由で選択した学生も52.0%が「進路を考える上で参考になった」と答えていて受講によって講義のねらいを各自受けとめたように思われる。しかし、「何となく」受講した層に、32%の役に立つことが「とくになかった」という回答があり、

講義の目的等について学生に事前指導を一層強める必要も感じられた。

2. 受講生の進路観と進路への不安

「私は将来への目標や就きたい職業についてまだ決めていない。考えてはいるのだが、まだ明確な結論は導き出せないでいる状況だ。このような状況は私が中学生の頃から続いていて、高校は自分の学力と照らし合わせて決め、理系へ進んだのも就職に有利であると考えての事である。実際のところ社会工学系への進学を決めた理由というのも、自分の学力で進学可能な範囲内の比較的広い分野が選択できる学科を選んだ結果にすぎないのだ。(中略) そんな中で興味を持った講義が〈大学と社会〉であった。北大の卒業生で様々な分野において成功を収めている方々のお話を聞くことによって、何か将来の進路を決めるための手掛りが見つけ出せるのではないかと考え履修することにした。結果、将来について考えるには絶好の機会であったので履修して本当に良かったと思っているし、講演して下さった方々にはとても感謝している。(中略) このように就職のきっかけは様々である。ここから感じたことは、まず実際に就職してみる以外に自分に適した職業を見つけることはできないのではないかとということだ。どのような職業であれその世界の中で体験してみなければ本質というものを知ることはできないと思う。向いていないと思っていた職業でもやりがいを見つけられるかもしれないし、徐々に自分に馴染んでゆくかもしれない。たとえ向いていないと判断したとしても、本当に自分のやりたいことを社会の中から探し出し、再就職できれば良いと思っている。そしてそれまでに経験したことは決して無駄にはならないし、その後の人生においても必ず役に立つはずだ。まずは社会という広い世界に出て自分を知ることが必要であると思う。(後略)」

「大学と社会」の試験代替レポート「私のライフプランと大学での学び」のある学生の一節である。大学入学後半年経って、自分は何をしたいのか、本当に学びたいことは何なのか迷っている1年生は受講生の約6割近くいる。

将来の進路への見通しをもっている学生はどのくらいいるのであろうか。「将来のつきたい職業は決まっている」という問いに対して、「ほぼ決まっている」という学生は36.3% (31.9%)であった。学部別に見ると、医学部の80%はともかく、比較的進路意識がはっきりしていると思われる工学部では30.7%でむしろ理学部より低く、文系では法学部が比較的高い(42.3%)が、他の文・教育・経済は平均より下回っている。

また「今の時点で現在の学部を選択したことをどう思っているか」という問いに対しては、16.1% (12.5%) が学部もしくは大学を変わりたいと答えている。10月の時点の調査より学部を変わりたいといった数字は低くなっているが、それでもかなりの学生が、自分の学部選択に疑問を持っていることは注目される。また10月に実施した進路意識調査では、「自分の選んだ専門で学びたいという意欲に変化があるか」という問いに対しては、プラス思考が40%であるのに対して、意欲が弱くなったという学生は20%あった。多くの学生は北大にはいることが目標であっても、大学に入ってから何をなすべきか、大学を卒業してからどんな進路を選択するのか高校段階ではほとんど考え

てこない。進路について考えたり、相談にのったりという経験を高校生活では体験してこなかったのである。「進路について高校で先生にどのくらい相談したか」という問いについては、担任教員と「まったく」あるいは「ほとんど」相談しなかったという学生が60%、進路指導や教科担当の教員とは80%近くの学生が、相談した経験を持っていない。先に紹介した学生のレポートのように、「学力に見合った」選択をしてきた学生も少なくないし、「高校まではいろいろ将来にやりたいことを考えたりしてきたが、それはすぐに変わっていくし、実際にそのものに向かって何か行動を起こすということは全くしなかった。そのときはきっと大学生になったらやりたいことを決めて、勉強しているのだろうなと思っていた、しかし現実には大学生になっても、まだ何も決まっていなし、もちろん行動にも移せていない（後略）」というように、ともかく大学に入ることを優先し、「自分は何がしたいか」という課題を先送りしてきた学生が少なくない。そうした中で「本当は医学部に行きたかったが点数が足りなかったので経済学部にした」「法学部に行きたかったが数学の点数が良かったので、工学部にした」など、ともかく北大に入りたいが「学力に見合った学部」選択をしてきた結果、10月調査でも転部や他大学受験を考えている学生が、毎年23%~30%いることは、もっと1~2年次の教育で留意すべき事柄であろう。

また33%の学生が、「将来の進路や大学での学習についてもっと教職員に相談にのって欲しい」と希望していることも、オフィスアワーの充実等を含めて、もっと方策を考える必要があるように思われる。なぜならこうした将来への見通しのなさ、勉強への意欲の低下と結びつきがちだからである。「勉強の目標を持って毎日こつこつ努力している」学生は13%で、60%が当てはまらないとしている。「将来への見通しのなさ」→「学習意欲の低下」→「課題の先送り」→「一層の学習意欲の低下」と言うことにならないような、キャリア教育は進路探索だけでなく、目標を持って学習するという、学習意欲の向上のためにも大きな役割を果たすと考えられる。

「勉強の目標を持ってこつこつ勉強している」という問いに肯定的な回答は、13.7%であり、「授業を良く理解している」という学生の割合も19.1%であり、「勉強が楽しい」とする学生は25.1%で、入学後半年の1年生の姿はきわめて消極的な姿が見えてくる。学習だけでなく、対社会についても同様で、「私は世の中に貢献できる力がある」では22%、「結果の見通しが付かない仕事でも積極的に取り組む方である」では33.8%が肯定的であるにとどまっている。

3. ライフプランづくりと発表会

「自分のライフプランを真剣に考えたことは今まで何度かあるが、私は幾度も悩んだと思う。しかし、まだはっきり見えてはこないこの問題がいつ解決されるか不安でたまらない。だから私はこの講義を履修したかった。自分の進むべきみちを決めるために。（中略）そんな中〈大学と社会〉の講義を受けた。いろいろな講師の方々が、いろいろなことを話に来てくれた。さまざまな考え、境遇、経験、これほど参考になる話はなかったと思う。すべての方がいろんな形で問題を抱えていらっしやう。それでもすべての方が成功している。挫けずがんばろうとする心がある。そういう強さをもっている。これが成功するための重要な要素だと思った。そして〈今からでも間に合う、

いや今からがむしろ勝負だ！)と私は言われたように感じた。とても励まされているように思った。(後略)」

この講義の試験代替レポート「私のライフプランと大学での学び」の一節である。このように漠然とは将来について考えるが、具体的将来の進路や職業を考えることは先延ばしするという学生は少なくない。レポート「私のライフプランと大学での学び」はこれまで漠然とであっても考えてきた将来の進路についても一度捉え返し、〈大学と社会〉の講師である現職の職業人からさまざまな職業生活や仕事のやりがい、生き方について聞くことを通して、より具体的な将来の目標とそのため的大学生活のあり方について考える機会として位置づけている。レポートのほぼ6割は上記のように「はっきりした目標を持っていない」、「いろいろ悩んでいる」といったものである。しかし先に述べたように54%が将来の進路について考える上で参考になったとしており、70.6%が「期待したことが学べた」としている。そしてこの授業とレポートが将来の進路をもう一度真剣に考えるきっかけになったとレポートの中で書いている。

「大学と社会」の授業は最後にこのレポートをもとに「私のライフプランと大学での学び」発表会を行っている。学生達は自分の同級生が進路と大学生生活の在り方についてどのように考えているか、知ることができるだけでなく、日頃友達同士でも、ほとんど将来の夢など語り合う機会がない中で、進路を話題とするきっかけにもなる。ライフプランの発表会についてのアンケートでは、「良かった」とする意見は60.4% (64.5%)で3分の2の受講生が自分たちによるライフプランの発表を支持している。しかし30.0% (5.6%)が良くなかったとしている。2004年度で良くなかったという数値が高いのは、学生の自主申告(発表者は5点成績に加点するという条件を提示している)による発表のため、発表者12人の内、8名までが将来の目標がはっきりしていないという内容で、「もっと目標を持っている人の話を聞きたかった」という不満が感想では多く見られたが、時間的な関係で内容を私たち教員が事前を知ることは困難なので、どんな発表があるか事前のチェックができない。しかし迷ったり、悩んだりしながらも真剣に考えなければならぬと言うことはどの発表者からも出されていて、そういう意味では考え得るスタートとして大きな意味を持っていると考える。

このようにライフプラン発表会のねらいは、この発表会がきっかけとなって自分の将来について真剣に考えたり、友人同士話す雰囲気醸成することであった。友人同士で話し合うきっかけづくりという試みは十分成功したとは言えないが、27.7%が「あなたにとって友達同士将来の話をするきっかけになったか」という問いに、「そう思う」と答え、33%は「そう思わない」という回答なので、多少の効果があったが、雰囲気醸成と言うところまで至らなかったかもしれない。むしろこの講義を出発点として2年次や3年次にインターンシップに参加したり、キャリアセンター主催の各種講演会、セミナーにつなげたり、学生の就職サークル系の課外活動に興味を持ったりすることに接続していくことで、将来の進路について真剣に考えたり、友達同士話し合ったりすることになるだろう。

小括

入学して半年という、大学へ入って受験戦争から脱したという開放感とこのまま漠然と大学生生活を送って良いのかという不安が出始めるこの時期に、将来の進路を考えることを目的とした現職社会人によるキャリア講義「大学と社会」を実施することは、これまで漠然と将来への夢を持っていたものにとってはリアルワールドとの関わりで夢を実現目標とする機会であり、はっきりした進路希望を持たない学生にとってはこの講義をきっかけに将来の進路について考える機会とすることである。そうした意味では講義最終回のアンケートでは受講生の90%が「大学と社会」を今後とも続けるべきだと回答し、2001年に行われたベネッセの調査において北大生の後輩にきかせたい講義としてこの講義がとりあげられており（ベネッセ文教総研，2002，p. 107），学生たちのこの講義に対する期待は大きい。

第2部 初年次学生の進路意識とキャリア科目の役割

はじめに 受講生の進路意識

「大学と社会」の授業は1998年度の開講以来、全学教育科目の中で最も人気の高い科目のひとつであり、後輩に受講をすすめたい科目としてもよく知られている。受講生にとってこの科目がどのような意義をもつのか、その手がかりを得るために、2002年度から毎年「大学と社会」の初回の授業時に「北大生の進路選択と学生生活に関する調査」を実施している。この調査は、研究重視大学に入学し半年が過ぎた初年次生の進路意識や勉強意欲の特徴を把握することを目的とする探索的なもので、質問項目は年度によって多少異なる。「大学と社会」の初回の授業の開始前に質問紙を配布し、授業中に質問紙の回答時間をとり、授業終了時に回収する。

本節では2004年度調査の結果を用いて、1年次生の進路意識について考察する。質問紙は6つの部分から構成され〔Ⅰ．高校の学習と進路（7項目）、Ⅱ．北大への進学について（3項目）、Ⅲ．学部選択（4項目）、Ⅳ．全学教育科目（4項目）、Ⅴ．卒業後の進路（4項目）、Ⅵ．学生生活への満足度（8項目）〕、有効回答は1年次生の463名であった。留学生を除いた450名の回答者の属性は表1に示したとおりである。時間割の関係で履修できない学部・学科があるため、受講生の所属学部により偏りがあるが、回答者総数は1年次生の約22%にあたる。

進路意識の概念図

受験生の進路意識の分析には、図1に示した概念図を用いた。この概念図は、質問紙で用いた進路に関連する質問項目を、入学前に関わる要因（学部選択や進学目的など）と入学後に関わる要因（卒業後の見通し、勉強意欲など）に分けて整理したものである。調査時期（入学後6ヶ月目）における受講生の進路意識を、学部卒業後の見通しに関する3つの質問項目によってとらえ、その進路意識は大学・学部選択にかかわる要因の影響をうけていること、また、それは調査時期における

表1 2004年度「大学と社会」回答者の属性

学部	文	教育	法	経済	理	医	歯	薬	工	計
人数	34	25	37	125	42	13	13	5	154	450
%	7.6	5.5	8.2	27.8	9.3	2.9	3.9	1.1	34.2	100
性別	女性	男性	計							
人数	127	323	450							
%	28.2	71.8	100							
入試区分	前期	後期	AO	計						
人数	367	73	10	450						
%	81.6	16.2	2.2	100						
現役/既卒	現役	既卒	その他	計						
人数	234	203	13	450						
%	52.0	45.1	2.9	100						

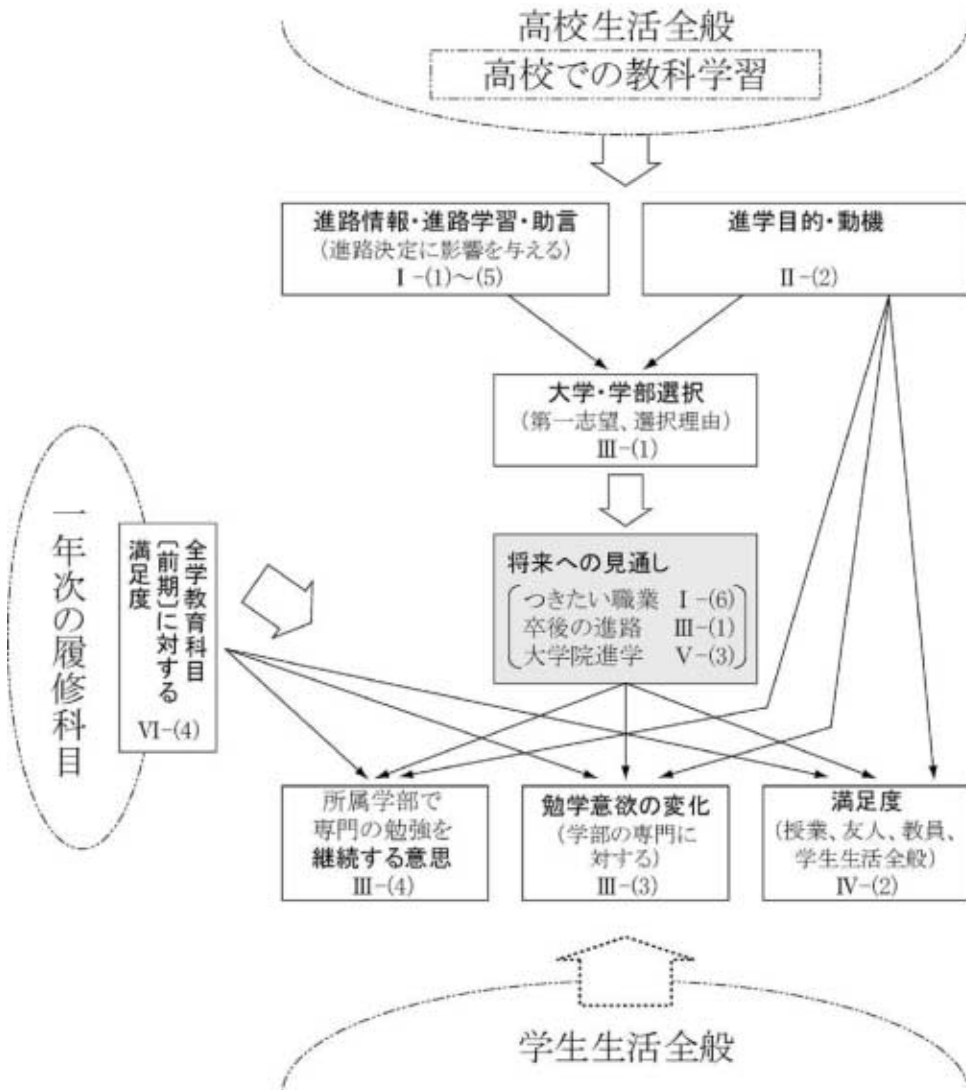


図1 進路意識の概念図

学習意欲や学生生活の満足度に影響を与えるという時系列的な関係に基づいて示したものである。概念図には各要因（四角で囲んだ部分）の測定に用いた質問項目の番号を明示した。矢印は時系列的な因果関係を示している。要因はすべて主観的な変数であり、回答者の生活全体のあり方に影響を受ける可能性があるため、「高校生活全般」と「学生生活全般」を点線で示した。本節では、まず、調査時点における進路意識の現状をとらえ、次に進路意識と密接な関連を持つ学部選択理由や大学進学目的、高等学校の進路学習などについて明らかにする。最後に、進路意識と勉強意欲との関係について分析を行う。

1. 初年次生の進路意識

概念図に示されているように、受講生の進路意識は下記の3つの質問を用いて測定された。これらの質問は卒業後の見通しを尋ねる内容で、回答は最もあてはまる選択肢を選んでもらった。

- 1) 将来つきたい職業について決めていますか（回答選択肢：5）
- 2) 学部卒業後の進路について、現在の程度明確になっていますか（回答選択肢：6）
- 3) 北海道大学以外の大学を含め、大学院に進学するつもりがありますか（回答選択肢：5）

3つの質問に対する回答結果を図2に示した。（将来）つきたい職業が「ほぼ決まっている」学生は36.7%である。また、学部卒業後の進路が「はっきりした希望あり」または「ある程度確かな希望あり」と回答した学生は53.5%、大学院への進学を「決めている」または「多分進学する」と回答した学生は44.7%である。他方、31.1%の学生はつきたい職業を決めておらず、42.9%は卒業後の進路について「模索中」あるいは「悩んでいる」と回答している。

「大学と社会」の受講生は、卒業後の進路に関してほぼ等しい三つのグループ、「はっきり決めている」、「ある程度確かな希望あり」、「決まっていない、悩んでいる」、に分かれることがわかった。この3つのグループの比率は、表2に示したように学部間に顕著な差が見られる。すなわち、

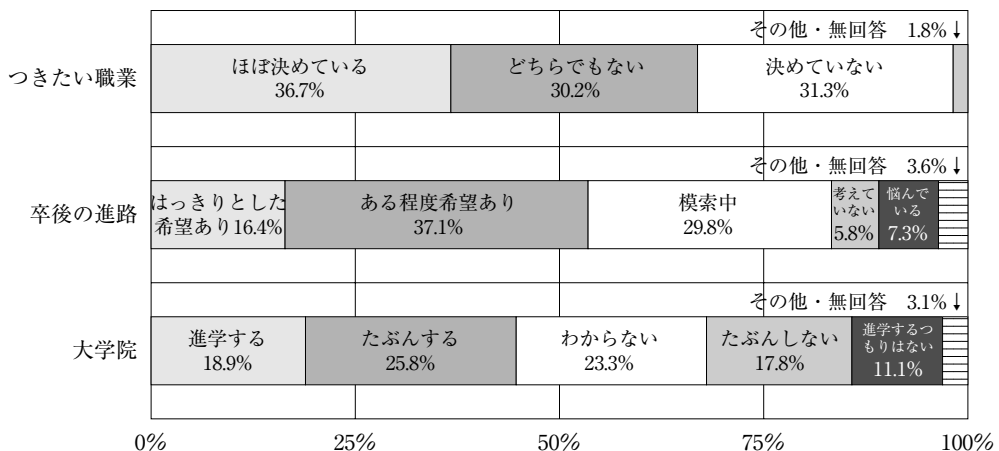


図2 受講生の進路意識

特定の職業と直結している学部（医学部、歯学部、薬学部）では「ほぼ決まっている」と回答した学生の割合が高い一方、特定の職業と直結していない学部では「決めていない」学生の割合が多くなっている。「決めていない」と回答した学生は文学部（48.6%）、経済学部（37.1%）、工学部（34.6%）の順であった。医歯薬系の学部では1学年の学生数が比較的少なく、入学直後から、明確なゴールをもった積み上げ型の共通カリキュラムのもとで勉学が始まる。特定の職業に直結していない学部の場合、コースや学科の選択（学科分属）を経た後に、2年次後期から専門教育がはじまる。このため、入学して6ヶ月目の時期はまだ学科やコースが決まっておらず大学での勉学や将来についての模索が続いている時期にあたる。この段階で大学卒業後の具体像を持つことはかなり難しいと思われる。

回答者の30.2%は将来の進路や大学での学習などについて、もっと教職員に相談にのってほしいと思っており、将来所属したい学部学科の教員とクラス担任との相談を希望する学生が多い。このことも「大学と社会」の受講生の多くが卒業後の進路について悩みや不安を持っていることの表われであろう。入学後に行なわれる学部オリエンテーションにおいて、自分が学びたいと思っていたことが学べないことを知る学生も少なくない。希望する学科やコースに進めない学生も出てくる。他方、入学してから興味・関心が変化し異なる分野を学びたいとの気持ちが強くなる学生もいる。入学時の学部選択理由の根拠が弱い場合は、不本意な事態の中で急速に勉学意欲を失ってしまうことが起こりがちである。次節では、受験の際の学部選択を行っているのかについて考察する。

表2 「つきたい職業を決めているか」の回答の学部間比較

学部 (人数)		文 (33)	教育 (25)	法 (37)	経済 (122)	理 (41)	医 (12)	歯 (15)	薬 (5)	工 (152)	計 (442)	
つ き た い 職 業	はっきり決ま っている	人数 (%)	6 (18.2)	10 (40.0)	19 (51.4)	36 (29.5)	19 (46.3)	9 (75.0)	14 (93.3)	4 (80.0)	48 (31.6)	165 (37.3)
	どちらともい えない	人数 (%)	10 (30.3)	11 (44.0)	11 (29.7)	42 (34.4)	9 (22.0)	0	1 (6.7)	1 (20.0)	51 (33.6)	136 (30.8)
	決まっていない	人数 (%)	17 (51.5)	4 (16.0)	7 (18.9)	44 (36.1)	13 (31.7)	3 (25.0)	0	0	53 (34.9)	141 (31.9)

2. 学部選択理由と進路意識

「大学と社会」の受講生の73.3%（317名）は、北海道大学を第一志望として受験したと回答している。しかし、受験した学部の選択理由を見てみると、積極的な理由と消極的・不本意な理由とが混在していることがわかる。学部の選択理由を7つの選択肢の中から選んでもらったところ、「将来進みたい進路を考えて決めた」が32.6%、「高校時代に持っていた興味・関心のある分野で決めた」が28.9%で、回答者全体の61.5%が自分の進路や適性に基づく積極的な選択であった。他方、「進みたい学部はあったが、成績を考えて決めた」が14.3%、「北大に入ることが目的だったので、入れそうな学部を選択した」が7.1%、「進みたい方向がはっきりしていなかったため、選択の幅が広いと思った学部を選んだ」が7.3%で、不本意や消極的な理由を選んだ学生が、全体の35%を超

えていることが明らかになった。

北海道大学が第一志望であったと回答した学生の比率については現役入学群と既卒入学群の間に差は見られなかったが、学部選択の理由については両群に顕著な差がみられた。現役入学群では、「高校時代に興味・関心のある分野で決めた」を選んだ回答者が34.5%で最も多く、「将来進みたい進路を考えて決めた」(28.0%)、「進みたい学部はあったが、成績を考えて決めた」(15.1%)の順であった。他方、既卒入学群では「将来進みたい進路を考えて決めた」が39.7%で最も多く、「高校時代に興味・関心のある分野で決めた」(24.6%)、「進みたい学部はあったが、成績を考えて決めた」(15.1%)の順であった。また、「北大に入ることが目的だったので、入れそうな学部を選択した」の比率は既卒入学者群の方が高く(8.5%>6.5%)、「進みたい方向がはっきりしていなかったので、進路選択の幅が広いと思った学部を選択した」の比率は現役入学者群の方が高い(9.1%>5.5%)傾向であった。これらの違いは、特定の職業と直結していない学部で現役入学者の比率が高いことに起因していると推測される。現役入学者や特定の職業と直結していない学部に入学者は、卒業後の見通しよりも、自分の興味や関心を重視して学部選択を行なう傾向が強いこと、現役・既卒に関係なく15%の学生は不本意な学部に入学者していることが明らかになった。

それでは学生はどのような目的を持って北海道大学に進学しているのだろうか。北海道大学への進学目的については、19項目について3段階(1=あてはまらない、2=どちらともいえない、3=あてはまる)で評定を求めた。図3に示されているように、平均値の最も高かった項目(2.5)は「専門的な知識や技術の習得」と「自分の適性を伸ばす」の2項目で、続いて3項目(「幅広い



図3 北海道大学への進学理由

教養を習得」「自分の学力にあっている」「やりたいことを見つける」「つきたい職業を探索」)が2.4であった。この調査で用いた19項目は、北海道大学アドミッションセンターが毎年新入生全員を対象として実施している調査(回収率96%)で用いているもので、4因子構造が確認されている；1) 専門的知識や技能や幅広い教養の習得, 2) やりたいこと・つきたい職業の模索, 3) 資格や免許の取得, 肩書, 4) 家族や教師の勧め, 親しい友人が行く。「大学と社会」の受講生はやりたいことやつきたい職業を模索することを、大学進学のための重要な目的として入学していることが確認された。

3. 高校での学習と進路を考える機会

2004年度の調査では、1) 高校時代に自分の進路や将来の職業について考える機会や相談したことがどの程度あったのか、2) 高校時代の学習は自分の進路や将来の職業について考えるうえでどの程度役に立ったのか、3) 将来の進路(職業や専門)について考えるうえでどのような情報が役に立ったのかについて尋ねた。まず、自分の進路について考えたり話し合ったりする時間についての回答は図4に示したとおりである。回答者の30%は自分の進路やつきたい職業について家族と話し合ったり、ホームルームで話し合ったり、自分で資料を集めて考える時間がかかなりあったと答えている。また、同程度の回答者が担任の先生と進路について相談する機会がかかなりあったと答えている。しかし、全体としては高校時代に自分の進路やつきたい職業について考えたり話し合ったりする機会はそれほど多くはなく、大学受験の際に、将来すすみたい進路にもとづいて大学や学部を選択するまでは至らない場合が多いようである。高校の進路指導に対する自由記述の中には、偏差値重視の指導への不満とともに「就職した人や大学へ進学した人の話を聞く機会があればよかった」

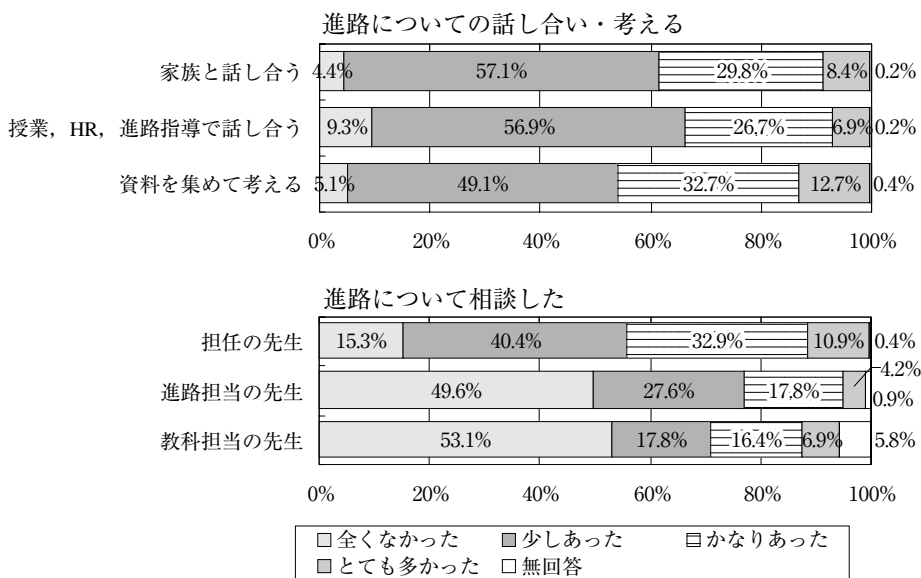


図4 進路を考える機会

「大学に行くことを最終目標にするのではなく、その先の将来について自分の希望通りに行くような指導が必要」などの要望も多い。しかし「やりたいことが見つからないのに進路は選べないし、やりたいことを見つけようとすると乗り遅れる感じ。乗り遅れてもいいけど損するから考えない」とのジレンマが正直な気持ちかもしれない。

図5は、高校時代に、自分の進路（職業や専門）を考える上で役に立ったことについての回答結果を示したものである。回答は複数選択であるため、各項目の選択率（全回答者数に対する選んだ人数の比率）をグラフに示した。選択者が最も多かったのは「友人との会話」で、「両親・兄弟のアドバイス」、「学校の教師のアドバイス」の順である。友人との会話の内容や家族のアドバイスの詳細はわからないが、進路選択におけるパーソナル・コミュニケーションの果たす役割が大きいことは興味深い。オープンキャンパスや大学訪問を挙げた学生は15.3%にとどまっている。また、高校での教科学習や社会体験学習等が役に立ったと考える学生も少ない。全体として自分の将来を考える際に自分で直接体験したことや学習したことよりも、他者からの情報に依存しがちな傾向であることが見てとれる。

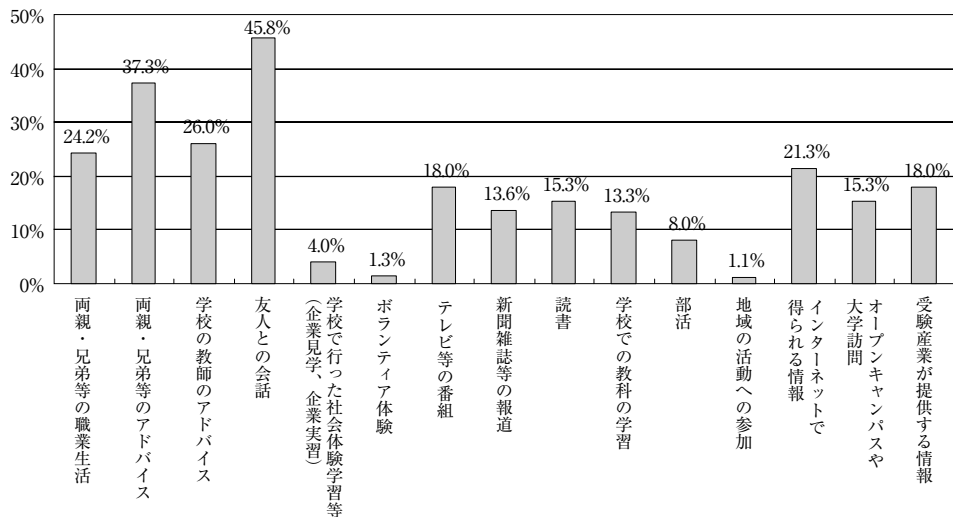


図5 職業や専門について考えるために役に立った情報（選択率）

図6は、高校での学習が大学で学ぶ力を育てるうえでどの程度役に立ったと感じているかに対する回答結果である。高校の学習が「大学で学びたいこと」や「自分の将来や職業」について考えるために、「役に立った」と感じている学生は20%程度で、「少し役に立った」を加えると55%ほどである。45%の学生は「あまり役に立っていない」あるいは「役に立っていない」と回答している。大学で学びたいことや自分の将来や職業を考える際に特に参考になった科目を3つまで挙げてもらったところ、理科が最も多く（29.7%）、社会（22.6%）、英語（19.5%）、数学（17.5%）、国語（8.8%）、その他（2.8%）の順であった。参考にならなかった科目は国語が最も多く（27.5%）、理科（20.3%）、社会（19.2%）、数学（16.3%）、英語（4.7%）、体育（4.5%）、家庭科（3.9%）、そ

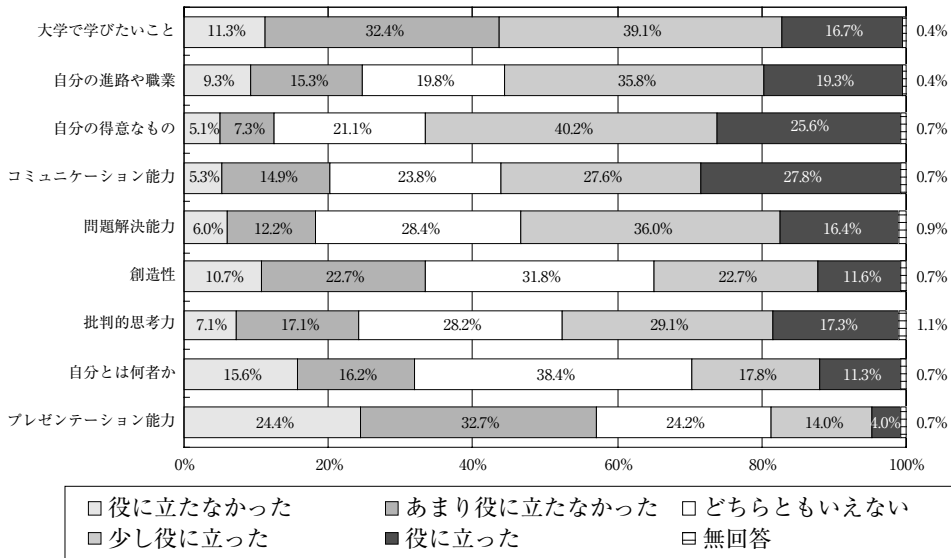


図6 高校の学習の有用性

の他（3.6%）の順であった。

高校での学習が自分の得意なものを知るうえで役に立ったと感じている学生が多いことは興味深い。「得意なもの」の具体的な内容はわからないが、教科の成績やクラブ活動など具体的な経験や見える側面に注目して判断している可能性が大きい。国立大学の入学者選抜では学力試験が偏重されるため、生徒はテストの結果や通知表などに依存して得意（あるいは不得意）な科目を判断し、学部選択をせざるをえないことは否めないであろう。

4. 入学後の勉学意欲と進路意識

大学入学後の学生生活の過ごし方については、以下のような回答が得られた；「ほとんどすべてを学業に注いでいる」（10.7%）、「学業以外にもいくらか力を割きつつ、大部分を学業に注いでいる」「学業とそれ以外のことに、半分ぐらいづつ力を分けている」（41.3%）、「学業以外のことにより多くの力を注ぎつつ、いくらかの力を学業に注いでいる」（33.6%）、（4）もっぱら学業以外のことの充実に力を注いでいる（10.4%）。また、現在の在籍学部で、このまま勉強を続けていきたいかどうかの間に対しては、76%（342人）が「はい」、22%（99人）が「いいえ」と回答している。「いいえ」と回答した学生のうちわけは、「できれば本学の他学部に移りたい」（36.4%）、「他大学に移りたい」（26.3%）、「悩んでいる」（30.3%）である。「いいえ」と回答した学生の73.4%が経済学部と工学部の学生であった。所属学部で勉強を続けていきたいと回答した理由は以下のとおりである；「漠然とではあるが、自分のやりたいことが見つかったと思っている」（38.2%）、「自分の学びたいと思ったことと一致して満足している」（23.9%）「進路が具体化してよかった」（14.3%）「学びたいことが見つかった」（6.3%）。

入学後の勉学意欲の変化については、「入学後、自分の選んだ専門分野で学びたいという意欲に変化がありましたか？」の質問を用いて6段階尺度で測定した。回答結果は、「非常に強くなった」(5.6%)、「かなり強くなった」(11.8%)、「少し強くなった」(21.6%)、「変化はない」(34.7%)、「少し弱くなった」(18.7%)、「かなり弱くなった」(6.2%)であった。勉学意欲の変化については学部間に差がみられ、職業と直結している学部(医歯薬系)の学生は入学後に強くなったと回答した学生が多く、消極的な理由による学部選択者の多い学部では「弱くなった」と回答した学生の割合が多い。また、男子学生より女子学生の方が「強くなった」との回答が多く、入試区分による差も見られた。AO入試入学生(10名)の平均値は4.50で最も高く、前期日程入学者(246名)の3.34、後期日程入学者の3.00の順であった。さらに、「将来つきたい職業が決まっている」群の平均値は3.60、「どちらともいえない」群が3.25、「決まっていない」群が3.05であった。「このまま所属学部で勉強を続けたい」群の平均値が3.53に対し「続けたくない」群の平均値は2.64であった。以上のことから、入学後6ヶ月目における勉学意欲は将来への見通しの有無と関係していることが示唆された。

勉学意欲の変化と北大入学後の学習体験との関係を探るため、前期に履修した全学教育科目に対する満足度に注目した。全学教育科目の学習に関する満足度は、3段階尺度(3=期待した以上に学べた、2=期待した程度に学べた、1=期待したほどは学べなかった)を用いて11の側面(例えば、幅広い教養、自分の専門分野とは違う分野のこと、自分が興味・関心を持っていること、など)に対して評定してもらった。11の側面のうち6項目について勉学意欲の変化と0.25前後の相関が見られた。さらに、11の側面に対する満足度を従属変数、入学後の勉学意欲の変化(6グループ)を独立変数として分散分析を行なったところ、表3に示したように6つの側面についてグループ間に1%有意水準で有意な差が見られた。前期の全学教育科目の履修体験が勉学意欲の変化に影響を与えている可能性が示唆された。

表3 勉学意欲群別の全学教育科目に対する満足度(平均値, SD)

全学教育科目から学べたこと		入学後、自分の選んだ専門分野で学びたいとの意欲の変化						F 値
		非常に強くなった (n=26)	かなり強くなった (n=82)	少し強くなった (n=154)	変化はない (n=97)	少し弱くなった (n=53)	かなり弱くなった (n=25)	
1	自分が興味・関心をもっていること	2.42 (0.70)	2.37 (0.64)	2.32 (0.61)	2.09 (0.63)	2.08 (0.62)	1.96 (0.80)	4.22**
2	現代社会で問題になっていること	2.54 (0.51)	2.37 (0.64)	2.41 (0.60)	2.09 (0.62)	2.17 (0.51)	2.08 (0.07)	5.41**
3	自分の専門とは違う分野のこと	2.19 (0.75)	2.21 (0.73)	2.19 (0.66)	1.93 (0.70)	1.93 (0.70)	1.76 (0.72)	3.62**
4	専門に役立つと思われること	2.65 (0.49)	2.39 (0.58)	2.42 (0.57)	2.22 (0.68)	2.06 (0.60)	1.96 (0.84)	6.78**
7	職業生活において役立つこと	2.85 (0.46)	2.57 (0.57)	2.64 (0.57)	2.37 (0.62)	2.42 (0.60)	2.36 (0.76)	4.89**
10	国際化時代に役立つこと	2.81 (0.49)	2.66 (0.53)	2.61 (0.55)	2.49 (0.62)	2.34 (0.65)	2.36 (0.70)	4.01**

項目番号は質問VI-(4)の項目番号を示す。

** : p<.01

小括

北海道大学の初年次生の進路意識（卒業後の進路や職業に対する見通し）は、入学後6ヶ月の時点で職業と直結した教育を行う学部の学生とそうでない学部の学生との間で顕著なちがいがみられる。それは教育課程の構造的な違いによる面も大きいですが、受験の際の学部選択の段階から生じるちがいにも帰因している。特定の職業と直結していない学部には、将来つきたい職業や卒後の進路の具体的なイメージを持たずに入学し、大学で「自分のやりたいことや将来の職業について模索すること」を期待して入学している学生が多い。こうした学生の多くは高校時代に「将来の見通し」よりも「自分の興味や関心」を重視し、進路選択の幅が広いと思った学部を選択する傾向があり、将来の進路や職業については十分な時間をかけていないことが明らかになった。中には悩んでいる学生や他大学へ移りたいと考えている学生もかなりいる。

卒後の見通しの有無は学生の学習意欲の変化に影響を与えることが示唆され、全学教育科目が学生のやりたいことや将来の職業についての模索を促進する役割を果たしている可能性も示された。「大学と社会」の受講生には特定の職業と直結していない学部の学生の占める割合が高く、「自分のやりたいことや将来の職業について模索すること」への期待が大きい。こうしたことから、研究重視大学におけるキャリア教育は、全学教育科目の特徴をいかして学生の期待やニーズに応える学習機会を提供できる可能性が示唆された。

まとめ

第2部でも述べたように、特定の職業と直結していない学部に入学者は、将来の進路やつきたい職業について具体的なイメージをもたずに入学し、大学入学後に将来の探索をするつもり学生の数が少なくない。しかし現実には将来の進路について十分考える時間をもたず、友人との会話でも将来について語り合うことはほとんどないようである。そうした中で、入学後半年経ったこの時期に実施するキャリア教育としての特別講義「大学と社会」は、卒業生の語るリアルワールドの風に触れることによって、将来の進路について再度考える機会になっていることは、本論で紹介したアンケート結果でも明らかである。

その意味では冒頭に掲げたキャリア科目としてのこの講義の3つの目標①「将来の進路を考えるきっかけとなる」②「実社会の仕事や職場の雰囲気を知る」③「大学での学び・学生生活の送り方の参考」といった点では一定の効果を上げているように思われる。しかし「大学と社会」1コマのキャリア科目で全てができるわけではなく、1年次から4年次までつながるキャリア教育の体系化が必要と考えている。北海道大学では、1年次の「キャリアデザイン」「大学と社会」「人と学問」などの特別講義をベースに、2004年から全学教育正課科目としてスタートした2・3年を主な対象とした進路探索型のインターンシップ、さらには法学部や工学部の専門教育として実施されている専門型のインターンシップ（コープ教育）があり、さらに学内の議論を広げながらキャリア教育の体系化を目指す必要がある。

「大学と社会」の講義のもつもう一つの意義として、受講生は卒業後の進路について考え、見通しをもつことによって、学生の学習意欲に変化を与えることを受講生調査結果は示唆していることである。

「将来への見通しのなさ」→「学習意欲の低下」→「課題の先送り」→「一層の学習意欲の低下」というサイクルに陥る危険性が緩和され、この講義の受講を通して、将来の模索をし、友人との会話の素材となったり、「ライフプラン発表会」等に触発されて、むしろ学習への意欲を高める方向につながる事が受講生のライフプランレポートで読み取られ、このようなキャリア教育がとりわけ初年次学生の学習意欲を高めるという視点からも捉える必要があると思われる。

【引用・参考文献】

- 安達智子（2004）「大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援」『日本労働研究雑誌』No. 533, 独立行政法人労働政策・研修機構, 27-37頁。
- 谷内篤博（2005）『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房
- ベネッセ文教総研（2002）『学生満足度と大学教育の問題点 2001年度版』ベネッセコーポレーション

An Examination of the Role and Effectiveness of a Career-related Course in General Education for Freshmen Enrolled in a Research University

Teruhisa MACHII*

Midori YAMAGISHI**

Many Japanese universities have recognized the importance of providing a head start for students in preparing them for work by offering career-oriented courses for freshmen. A large national research university started a course in general education curriculum entitled “University and Society” in 1998 where alumnae, working in various settings, are invited to talk about their college lives and work. The course has been very successful. This paper describes the structure of the course with an analysis of students’ essays and survey data gathered in the class. It was found that the unique features of course design helped students to clarify their career and personal goals.

* The Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Professor

** The Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Professor